法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-29

<随想>中野重治『愛しき者へ』について

小田切, 秀雄 / ODAGIRI, Hideo

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
30
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
76
(発行年 / Year)
1984-08-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019397

中野重治『愛しき者へ』について

小田切秀雄

いま、中野重治の『愛しき者へ』を読んでいる。――読んでいる、といっても、こんど下巻が出たのをきっかけに全体（上下二巻で約千頁になる）を通読して『週刊読書人』に書評を書いたので、その直後からもう一度読み返しているのである。

私小説的な方法をとりながら、その個々の素材をつきつめて作品世界を客観的に堅固に構築してしまうこの作家は、〝告白は嫌いだ〟といって告白や私生活をそのまま語ることを拒んできた。なれ合いやべたつきをきらい、自分が負わねばならぬ責任は進んで負って、それをはたすために力を傾け、泣きごとを決していわぬというのが中野の日ごろの態度で、それは時に家父長的にさえ見えるくらいだった。それだけに、その中野が、〝愛しき〟妻の女優原泉子にあてたぼうだいな手紙（なお、妹で詩人の中野鈴子にあてたもの、中野の小説『村の家』に孫蔵として出てくる父藤作にあてたものがいくらか加えられ、全部で四九九通になっている。そのほかに、中野の手紙を理解するに必要な限りで原や鈴子・藤作の手紙も採録されていて、それがまた抜群におもしろい）の全部が今回そのままの形で発表されて、はじめてこの作家の私生活が私信という面から明らかにされたということは、それらの私信それじたいが人間的・文学的に実におもしろいということを越えて、一つの文学的事件となっているといっていい。筑摩書房から出ている全二八巻の『中野重治全集』は、これによって新しい照明を与えられることになった。

この手紙集について語りたいことは盡きない。『週刊読書人』の書評ではそのうちの二、三のことを書いたが、ここにはまたべつのことを、二、三書きとめておこう。その一つは、中野重治というひとが一人のひとを愛しぬくことのできる人間だったということだ。ひとときの愛とはちがう持続的な愛をつらぬいたということは、男の中野のがわだけから見るべきことではないが、ここでは中野のがわだけにしぼっていえば、結婚の相手として仲間たちから勧められた原泉子について、中野は次のような発見をした――そういうところから結婚と愛がはじまっていたことが、主として妻にあてたこの手紙集の前提となっている。戦前の中野の短編小説『留守』（『全集』第二巻）の一節で、こんどの本でも編者の沢地久枝が〝注〟のなかで引いているが、これはそのまま中野と原泉子のことと見ていい。

……おれには、関のあのくったくのないところがかなわない。善良なところがかなわない。頭から頭の地までじきにまっかになるところがかなわない。そのくせあいつは、破けそうに赤くなった顔をそむけることも隠すこともできないんだ。

結婚直後に最初の投獄七カ月がくるが、そのかんの原泉子あて（一部は妹鈴子と二人にあてた）三九通と鈴子あて等四通について、沢地の解説では、〃かならず看手が立合う面会、かならず検閲の眼にさらされる手紙。「奴隷の言葉」とよばれた屈折した表現の枠のなかで、中野重治の思考も情感もとらえられている枠をこえ、みずみずしくほとばしるものをみせている〃、と書かれているが、まさにその通りで、結婚三週間で引き裂かれて獄中生活を送っている中野は、新妻の原泉子にたいして〃お前さん〃というその当時の亭主らしい呼びかけをしながらこまごまと書き続けている。手紙は獄外の世界との連絡通路でもあり、メモでもあったから、そういう面がいちじるしいけれども、それをめぐってまたはそれの背後に、妻恋いの気持がさまざまな形で示されている。それは『留守』のなかのさきの一節からそのまま続いているところのものだ。つよい人格の力は破婚の原因となることもあるが、中野の場合には、ひとりの女性を愛しぬき、その持続は破られることがないという形で現われている。執筆禁止処置いらいとくに中野にたいしては体制がわのすさまじいむき出しな弾圧が続き、それはひとたびは夫婦のあいだの破局になったかもしれぬこじれをつくりだしたりもするが、そういうことを経た上でのこのつよい愛の持続は、〃連れ合い〃としての半世紀余りにわたる比類ない中野夫妻の存在を支えているところのものだった。

妻にあてた手紙の一つに、次のような部分がある。一九三〇年一二月四日、刑務所からの手紙の一つである。

ある晩よなかに眼をさますとカケブトンの上に月かげがあって、それが静かに移動していた。それはどこか板の間にこぼれた水に似ていた。その移動する様子をよく見ようと思ったが眠いのでまたねむってしまった。わしらの眠ってるときも天然は動いているということになにか安心しながら。

しかしついこの間まよなかに眼を覚ました時には荒々しい冬の雨が降っていた。その石だたみを叩く音が非常に高くて、それを聞いていると俺の心臓がその石だたみの上に取り出されて雨たたきにあっているように思われ、胸をおさえんばかりだった。

心臓というものの現物を見たことないが柔かなものだろう。それに太い雨が強い勢で注ぐためにそれに孔があき、石だたみの上ですっかりつめたくなるように思われた。頭がさえてすこし困ったが、やはり間もなくまた眠って行った……。

この部分を妻恋いの心にすぐに結びつけることはできない。この部分は、まさに芸術家としての中野の力量によってつくられたあざやかなイメージとして、さまざまなことをひきだしてくる力をもっ

ているが、それらのうちのひとつとしてならば妻恋いの心に結びつけて考えてもいいであろう。それにしてもこのイメージの表現はみごとで、こういうまったく〝表現的〟といっていい部分が時どき見出されるというのもこの手紙集の特色の一つである。

文学意識・文学理論としても実におもしろい部分が随所に見出される。次に引くのは、二度目の投獄のときのものだ。一九三三年五月二日の中野鈴子あてのうちの一節である。

詩をかいたそうだがよく勉強するのがいいでしょう。詩は説明でないということが大切だね。笑い声、ほほえみ、汗、泪、あくび、そんなものに似ている。汗は何も語らぬが、語らずして額に浮ぶことにおいて、一切を語っている。

詩は何ごとも説明せず、しかし一切を語るものでありたいね。シナの学者もそんなことを言っている。詩とは言葉の余りで、言葉で説明出来ず、オオとかアアとかいう声になって出て、それが自然の節奏を持って来るところのものだとかいう風に言っていた。

それから、一篇から次の一篇へと（たとえ小さなものであろうと）作者の進歩が跡づけられる位に進歩して行くことが望ましい。上手になることを心がける必要はない、ただ詩の心が深まること、これ一つが大切だ。俺は再び詩作出来るようになったらこのやり方で傑作をかくのだ。深く深く、その他に何もないとはいえないが、しかしこれほど重大なことは他にないと思う。

また、自分の書いたものについて、〝ロクでもないものもあるのだが、それどころか、面を掩いたような、顔を土に埋めて、頭の上で手をこすり合せて、「カンベンしてくれ、この通りだ！」と叫びたいようなものもあるのだが、仕方がない、それらを書いたのはこの俺で、俺がそれらをかいたのだ〟といっているところもある（一九三二年一一月二五日付原泉子あて）。芸術家としてのはげしい羞恥心の表現としてもおもしろい。

この手紙集にはいくつかのピークというべき時期があるがその一つは、いうまでもなく中野の〝転向〟の時期である。そのときのことを確かめたくてこの書を見る読者・研究者もいるかもしれぬ、というような部分だ。中野の原泉子あておよび父藤作あての手紙だけでなく、沢地の立入ったコメント、また出獄直後の中野夫妻の手紙のやりとり、さらには中野の日記の抄出、等によって、〝転向〟をめぐる経過がくわしく跡づけられており、それは従来ほぼ明らかにされていたことをくつがえすようなものはふくんでいないが、事態の経過がはるかにくわしく、立入って明らかにされるにいたっている、といっていいであろう。中野が粟粒結核だ、という誤診をめぐって生じたパニック、そのなかで転向が行なわれ、中野は一方でワナに落ちたと思いながら同時に、〝言いわけのできぬ〟、〝取りかえしのつかぬこと〟をしでかして、原泉子にたいしても〝お前さんには煮え湯をのませたし、当分つづけてのませる訳でまことにすまない〟、云々とくわしく書いている手紙がここにある（一九三四年

六月一一日付。出獄直後に一時別居したときの手紙)。また、その直後の八月一〇日に郷里の福井の村から原にあてて書いた手紙には、

今夜家の借金の話なぞを聞いた。五千円位だ。今後は家の方も見なければならないだろう。それが当然でもあるし。また転向の批判を受けた。美しい例として小林多喜二、醜い例として床次竹二郎を出された。今までの仕事を帳消しにしたくなければ文筆を捨てるがよかろうと言われた。俺の立場を母に納得させるためにした父の長い努力があのことで無駄になった等々。いちいち肝に銘じた。その他いずれ話す。

その前日の八月九日の中野の日記に父藤作のことばが書きとめられてもいた、として沢地が次のような部分を引いている。「多喜二はいいことをした。遊び、遊戯、屁をひったも同然。帳消し。」「筆を全く捨てるのが良策である。家族、父の配慮。他の方面にもっと修練出来た人がいくらもある。床次の如き利口であるが人として駄目。葉山の労働行き。公会欠席。死ぬまで行くものとして凡てを所置して来た。妻の教育。家長として。(相続人として。)……小塚原で骨になって来る積りで。」。中野の小説『村の家』での、作中の父孫蔵がこの小説の主人公である息子にいうことばが、ほとんど事実そのままであったことがこれでわかる。実際にこういうことばで批判された中野は、まさにその痛覚においていわれたことばを書きとめ、妻への手紙に書き、さらに作品のなかのいわば中枢にすえたのだ。中野の〝転向〟の問題はさらに立入った検討が必要な大きな問題であるが、この手紙集がそれに関しても一つの前進をつくりだしていることは評価されねばならぬ。なお、こういう父や妻(および妹)にかこまれていたことが作家中野を支えていたということも、この手紙集はいわば実証的に示しているといっていい。

(文学部教授)